裾は黑羽二重定紋の衣類に無紋の上に羽織さては大小を横たへられましたるまゝ探き編笠を頭に頂だいてをりましてございまするスルト溝がございます其の溝一ぱいに家は立ッてございまして一面の羽目この上に武者窓をズーッと風入れのために一ぱい取ッてございまするから其の武者窓より中を差し覗いて見れば道場に稽古をつけてをりまする人がチャンと見えます一段高きところに座を構へて餘念もなく門人に稽古を指揮してをりまする其の一人は是れあん別人ならず幡谷彌九郎その者なり彼れ已れが容貌を變へんがために切り髪にして肩打つばかりに絲の毛を撫下げにあし前齒を一枚ワザと缺きましたものか人相を變へて頻りと指揮をいたしてをります此のときに夫れを見ましたるところの白井はクワッと急き立て　白「爾れャレ此奴此のところに居りしとは夢にだにも知らなんだかイデ其の儘であらば養

父の讐敵ト既に踏ん込み打たんと致しましたか「イヤ待て暫し急くところでおい今其莊で人目も繁き其の中のみならず道場に稽古日にて大勢の門人稽古をうける眞ッ最中されば折り惡し掲て加へて我が身は兇狀持つ身の情けなさ迂闊に組暴な擧動して腑を噛むとも詮あかるべし復讐全たうなせば江戸表へ下向を し絶えて久しき池田の江戸屋敷に參ッて讐敵を打たれるか因州鳥取に乘り込んで讐敵を打たれ本庄が遺子三男か三女か何れ両人の者のうちに我が首を遺はすべきところの身は大切なる身の上なり斯くのごとく其の彼れが居處の明白に知れゝば最早や猶豫も致したればとて大丈夫である」とて其のまゝ確と見屆けおいて旅宿へ歸り主人に對面をして宿料の悉皆の番付を貰ふて諸拂公殘りなく仕まつり食事をいたして日の沒れるを相待ッてをります日は西山に全たく沒して早くも點燈の頃はひ時に權八は女

中を呼んで扨ていふやう　白「アー女中や、至急に發足をしおければ、成らざることのあって今只此の所を出立いたす先はど旅籠料を仕拂ッたが確と宜しきや　女「ハイ有りがたうございひまする然やうならば半旅籠を頂戴をいたしまして餘分のところはお歸しを　權「ア是れ〳〵決して其の心配には及ばぬ爰で振り分けの荷物の口を開いて一枚の着替を取ッて夫れと着かへ最とも身輕に扮装て定紋付いたるところの今まで着用の小袖さては羽織等に至るまでを風呂敷に包み入れて是れを携さへ此處を出で立ちまするあり急き急いで天滿の老松町へ乘り込んで參りました玄關脇の物影の所へ右なる衣類を差し置いて　白「アー少々物ヤす頼ひ「ハイ。と答へて一人の門人が夫れへ立ち出でゝ參りました兩の手を付いて　門「エー何れからお出でに成りました　白「ハア自分は江戸表の方より參りましたものでございひまするが先生はは

在宿でございまするか　門「ハイ師は在宅でございまする　白「ウンヤテ付かんことを承たまはるやうでございまするが當道場の主人は切の髪の前歯の一枚缺けてをらゝ失禮ながらお方が主人でございまするナ。不作法なる此の尋ねに執次の門人は白井の顔を眺めてをりましたが　門「ハイ然やうでござるお言葉の通りヤテ尊名は何と仰せられる　白「然やう然らば其のお方に確と違ひがあいなれば拙者が參ッたとヤせば相分りまするでチト憚かッて名前は名乘られませんによッて何うぞ宜しく尊公よりお傳へを願ひたい　門「エー尊名は何と言はるゝか承たまはりませんでは甚はだ取り次ぎますのに大きに迷惑をいたします何と……。此の間に面倒とや心得けん權八はメーッと艸屋を脱いで上にあがッたッカ〳〵進みいらんとなす　門「是れは如何である人か狂錯と一勢權八を取らへんとなしたるとき「邪魔す

るか」と一聲叫ぶと見る間に……「キャッ」と一聲彼の者は血煙り立て其の所へ打ち倒れましてございまする是れなん手練の早業に拔き打ちにありましたものでございましたらふッか〳〵と馳せ入る時に未だ両名他にれて晩酌に大杯を傾ふけてをりまする内門人に頻りと周旋さ玄關前の門人が押し問答をりました谷彌九郎何か聞ゐる二三まするとと思ふ間にッか〳〵と中に蹈ん込み來ッた此のときに谷「何奴だ是れ何者なるぞ。」とキッと玄關の方を眺めるトタンにスラリ襖を開いて其の所へヌックリ立ち上ッた白井權八「アッ」と驚ろく前名橘谷彌九郎間はずと知れた事の破れと後ろの刀かけにありまする一刀を取ッてズックリ物をも言ひ得ず立ちあがる此の權勢に両人の扱ては門人おの〳〵仔細は知らねど劍を取ッて立ちあがッたり血沙の壁れる村正の劍を取ッて大音の揚げて權

八は　白「ヤイ彌九郎おんな父を打ちながら致さて言はふやうおい極悪人め本庄助左衛門どのが切りしおそといふことをヤして吾僧を欺かりしばかりに氣の毒にも本庄氏を非業の刃のうちに最期を遂げさしたりサア今日こそ其方の一命をヤし受くるによッて覺悟を致せ俱不戴天の眞の父が怨敵めト眞ッ甲よ劍を振り翳せばセヽラ笑ッて　彌「駄止れ武士の意氣地で切ッて捨てた夫れを乱きず我が辯才のうちに欺かられて斯くのごとき失策を見るも爾が愚おるゆゑだ醇言いはずと死ばッてしまへソレ兩人。ト言葉のうちに「心得たり」ト左右より一度に振きつれて切ッてかゝる　白「何を小癪ト一足さがッてチャン〳〵チャキン暫し打ち合ふ其のうちに大喝一聲眞ッ甲より身柱の邊りまで一人は其の場へ切り倒されましたアッ」と怯ひを横なぐりに傍への門人……「ウン」と一聲身体二つに相成ッた是れを見まするや否や能はとも

のをと一散ばしりに庭の方へ逃れんずるところを白「卑怯ものめ。」と一聲高く切り込んだり……骨切る音が此の夜の暇ウンと悲鳴のうちに爾れより出でゝ爾れにかへる幡谷彌九郎廊下に倒れて其のまゝに絶切れた他に召し仕ひとても有らざる容子の確と家内を見定めましたにより悠然と白井は盗所へ參ッて先づ血のつきましたる手を洗ふて顔を洗ひ再たび玄關前に馳せ出でゝ小影においたる一包みの以前の衣類を持ち來ッて悉皆上衣を脱して足袋を取り身の廻りを若かへまするあるホッと一息帶を ギッチリ堅く結んで大小さし逃れ去らんといたしまゝたが何れにしても宜からぬことにて貯蓄をなしたる當家の主人が非道のうちに貯はへある金子持ち行くともナニ不都合のあるべきかと鍋筍あるひは葛籠を開ちやくして有り金悉皆を盗み懐中に差し入れましたが何しあら宵の口とて家内中切られし非常を聞きつ

け早や表口には一ばいの人立ち夫れ〳〵捕り方等の來りました容子に見うけられまゝた夫れと見て權八は表口より出でゝ益なき公儀役人に怪我さしてならずと爰で裏手を押し明け出でましたる時には早や裏口にも見物が立ッて容子を見てをりましたが見ソレ出たソレ彼れだ。ト一聲高く呼はるなりドッとばかりに路次を馳せ出で四方へ散乱いたす夫れと見て捕方の役人　役「ほ」用だ曲者神妙にせよ。切り込んだ。ヒラリ体を避けて襟首掴んで「エイ」と彼方へ又た左りから來るを是れも向ふへ投げ抛ッた其の手練に少し怯んだ時に柄に手を掛け　白「無禮をすると一命がないぞ。」と「ヘッタ」とばかり白眼つけたり其の勢ひの侮どりがたきがゆゑよ誰れあッて傍へ近づかんとする者のでさいませなんだ逃を伺がひ一目散に馳せ出だす。「ソレ追へや逃すな遣るナ。」と跡より追ひ來る多勢の捕方漸〳〵に逃げ廻ひつゝホット一息おもふに

「淋しきところを引き揚げては却ッて恐かりなん」と、存じまして道を成るがたけ繁昌なところ賑はふところと急ぎ行きつゝフト左り角を見まするに角の黒白の大形に染め抜いたる最と長き暖簾の見世にかゝッて風に動きをりまするフト見れば是れなん床屋でございまする諾づいて前後を伺がへば集ひ來る客子もなく幸ひに追擊を免かれましたやうに心得ましたがゆゑに是れある暖簾を分けて中へズッと道入ッた折りよく他の客もをりませんだゆゑ權八は　自主人チト取り急いで頭を遣ッてくれいハイ能うお出でや……ハア頭を宜うをすでアンタ彼處に水がありますでナ頭を能う濕して來て下はれ。顏を洗ふて己が頭の月代へ淨山に水をつけて是れを濕しまた腰を掛けると主人は髮剃を合せをりましたが是れから月代に掛らふとして權八の頭を見ると長さ殆んど一寸ばかりも生へてをりますゆゑに其の美ごと

なるに最とも剃り惜みをしてにマア貴君の頭髮は生へてをりますさかい剃らん方が宜いでありふと思ひましてあア。苦笑ひをして　自ア、イヤ〳〵餘りに毛が生へてをるから何うも逆上て可んスッカリ奇麗に然うして頭も成りたけ大髻でなく粹に結んでくれ　主ハイ然うでございますかハア惜いことやあア毛はマア宜ゑ毛でございますなア。ト世辭タラ〳〵すッかり一寸ばど延びし月代を剃り取り鬢を剃ッて悉ら皆頭を結ひ上げた人相を幾分か變へましたるに安心をしろ小銀一つを取り出だして　自主人や是れで釣錢は入らんから何うぞ仕まッて置いてくれ　主ヤア大層マアどゑらい散財かたで有りがたうございますナ貴君ヂャアマア切角でございますでお辭義おしに頂戴をいたして置きますさかい。ホク〳〵喜こび押し頂だいて　主婆アや茶々でも煎て早う進んかナア　自イヤ決して其

の心配には及ばんのだ。ト言ひつゝ是れより白井は此の家の上へあがッて帶を解き左右の袂や何かへ掴み込んで來た金子あるを　チョット數へて見ると大凡四拾両以上でございませうデ喜こんで胴巻に入れ腹へくゝして衣類を着替へあはして帶を堅く大小を帶しながら

白「主人や　主「ハイ　白「筋向ふに卿屋を賣る家があるやうだがチョット一足買ふて來て呉れ　主「ハイ。ト直に一足の卿屋釣錢の餘分を又た〳〵是れに差し置いて悉皆姿を變へましたるまゝ此の家を立ち出でました青々とした頭キリ〳〵と定ッた衣服素足卿屋穿きといふこしらへで歩行を進め參りまするうち最とも群集の大勢に出で會ひましたから何ごとあらんと思ひまするに是れあん道頓堀の角の劇場が打出ましたのでございまする打ち出しの太鼓につれて群集あす此の間へ紛れ入ッて歩行を進めると左りッ側の桝屋といふ茶屋の二階で底除け騒ぎ戯妓太鼓に取りまかれてワイ〳〵騒いでをる者がございますするから名も高い幡隨院の長兵衛が子分の一人棺桶の勘太といへるものでございまするから白井は見て叱懲り如何ある考がへが有りましてかヌッと彼の劇場茶屋の門口へ這入りましてでせいまする。

第拾七席

白「アヽ少々物をヤしたい一すとお願ヤしたい。夫れと聞き取ッて女中は門口へ急がしさうに立ち出でゝ両手をつかへ　女「アノ何でございます　白「ヤ別段ではあいが二階に騒いで居る彼の客人に對して少々お目にかゝりたいものでござる何うか然やう執り次で貰ひたい　女「然やうでお名前は何と仰しやいます　白「ウン名前の儀か。ト小首を傾ふけてをりましたが暫らく勘考をして

白「ヤ名前をヤさんでも宜しい斯ういふ者が參ッたりといふことをヤし帳へさへ致すれば夫れにて宜いのだによりて然やうヤしてくれい　女「デございますするがお名前を何うぞ承たまはりたふございまする　白「ナニ言はんでも宜しいのだ。名前を何うあッても權八がヤしませんから二階へ上りましたところの彼の女中が客の脇に両手を突いて　女「アノお客さん二階の貴君に會ひたいと奇麗なお武家がお出でになりましたよ　勘「ナニ己れに遇ひてへッて奇麗な武士、何んな男だ　女「何だか知れませんが俳優衆で　勘「宜いとは無いんですか何うも妾しのお見ヤしたところでは俳優衆かと思はれますんでございます。此のときに勘太は　勘「ウン然うか夫れぢやア江戸ッ子の威勢の宜いのに會ひてへッてんで多分俳優か何かい世辞にでも來やアがッたんだらふ兎に角誰れでも構はねへ　勘「ろくんぢやアねエから此處へ通してくれ　女「アノ然やうならば此方へお通しヤしまして宜しうございますか　勘「宜いところぢやアねへ誰れだからと言ッて驚ろくんぢやアねエ早く此方へ通してくれ兎に角會ひてへといふなら會ッてやらふ。ト一杯機嫌の勘太が立ち騒ぎつ如何なる者の來るであらんト待ち受けた女中が　女「此方へ。ト白井を案内に權八が會釈をしつ二階へ登ッて勘太を見、棺桶も如何あるものが尋ね來しかと互ひに顔を見合して吃驚り仰天　勘「ヤア貴君は先生　白「ウン勘太どのか　勘「此いつア宜いところでお目にかゝりやしたが一体ヤア貴君は何うあせへましたんだ　白「オヽハサ仔細あッて此の坂都へ參ッてをるが拙者が爰で其許に會はふとは思はあんだあア　勘「私ちも貴君に此んあところでお目に掛らふたアゆめ〳〵存じやせんでございやした　白「何はさかれ不思議な對面サア一つ先生召し上ッせへやし。献す盃を取りあげて大膳にも權八は天滿の老松町

で弼九郎師弟を切ッて立ち退き床屋へ逃入ッて道頓堀の江戸屋と言へる劇場茶屋の二階で盃きを揚げまするも實に剛膽なものでございまする此の時に他の女中や藝妓舞妓は青〳〵とした顔り立て頭の女を欺ひくことき權八が奇麗なるに見惚れつゝ皆な口〳〵に「お江戸の俳優衆ではないか」お子頭りにナしてをりました飲みはした盃を權八が勘太に献して膝すゝませ　自「コレ勘太の尊公へ幡隨院の元締から拙者が江戸表を退散をするとき に事の始末の深い秘密のあッたことを尊公へ言ふたか夫れとも又た他の人に話しでも致したか知ッてゐるか　勘「ヘエー何だか少しも存じません只だ急にぱ發足におりましたんで不思議には思ッちやアをりましたが一体何ういふわけでぱ發足に成りましたもんだか其りやア知ッてゐやアしません。小首を傾ふけ權八は「流石は長兵衛さてこそ是等の者には我が身の上を言はあんだか」

ト留し諾づいて考がへをりました語を重ねて白井が　自ジッテ元締は沙無事であられるか丁度其許に爰で會ひしは何より手前が幸はひで實のところは是れより自分は因州鳥取へ乗り込んで少しく此の身を人に遣らあければ成らあいやうな事がらが有るのだが思ひ通り本意を果した其の祖かた〳〵一度は江戸表へ下向をして長兵衛どのに會ひもし積る此の身の身の上ばなしを委しくいたしてお別れを告げやうといふの心よて是れあるが其許に會ふたら書面を參らするで元締どのへ宜しう傳へくれられよかし勘太どの。思ひ込んだる此の言葉に勘太は両眼に涙を一ぱい溜めまして　勘「先生その手紙を屆ける親分が此の世にお在おせへましやア此んな大坂へまで私ち始め子分のものが態〳〵逃ちやアめへりやせん　自「ナニ此の大坂へ逃げて參らん、ウン、とは其りや何うしたわけだ。氣づかひ間へば　勘「アノチエ、オオ親分は

トウ〳〵お前さんも知ッての通りの櫻川五郎藏といふ相撲のことから旗本衆と縺れを生じて其の結末が水野の屋敷へ只た一人でお出でおされて十郎左衛門が卑怯の鎗に立派あ淆最期トコヲ私し共ア棺桶をもッて元締を迎へに行ッて引き取り歸り一時は屍骸を葬ふりやしたが兄弟分や子分の者が親分の讐を打たざア成るめへといふところから大勢よッて徒党をなし水野の屋敷へ切り込んで思ふ存分乱暴なしトウ〳〵散〳〵蹴ちらした揚句の果に引きあげて歸ッて來ると可ませんや何をいふにも先方は直參、町人風情の町奴がドウして〳〵此の乱暴を何で見捨て置きませうか大勢捕方に追ひ廻され住み馴れた江戸にも居られずトウ〳〵子分の衆は散り〳〵バラ〳〵實は各自に此んな遠い大坂あたり又は四國の果てまでも落ち延びた者もあるし出入りの屋敷の大名が悄然と思ッて屋敷うちへ隠まふて呉れた屋敷

もあるのでございへやす知ッての通り私しなんざア餘まり盛勢の宜いはうぢャアございへやせん腰病風に誘引はれて皆あと矢ッ張り散り〳〵に此の大坂へ流れて來て今ぢやア帆柱の伊之助の家を尋ねて厄介におッてをりやすわけでございへやすが何うか何分先生此の末とも貴君なんざア國々をお廻りなさるやうでございへやすから然うでもねへ大勢の子分の者でございへやすから同子分の者に會ッた時に勘太は無事で大坂の道頓堀の帆柱かたに厄介におッてゐたと何うか傳へてお呉んあせへ。ト一伍一什息をもつかず物がたる承たまはッて白井は夢に夢見し心地ぞして暫らく茫然として聞きをりましたが言葉も出ですぼしてあッた此のとき二三他にをりました女中藝妓もヤンヤリ話しの容子に一人立ち両人立ち捨て加へて白井が談論んで行くについて目をもて左右の女中をば夫れと言はねど遠ざけましたものでございますか

ら今は一人も此の席にはゐなかッたのでございます四邊り見廻し全たく次にも人一人をらざるを確と認めて權八が膝すゝませ小聲になッて

白「勘太必らず心配いたすナ拙者も因州浪人白井權八此の身の大事を打ち明けて實は元締に長い間だの厄介ば意見に基づいて其許は知らざることながら思ひを果した曉きには親分の御意見通り故郷へ參る積りであッたが今此の場合で三月や半年後れたところで何てう此方の身の上について別に事も有るまいにより是れより江戸表へ下向をして水野が屋敷へ只だ一人切り込んだ上へ坊主が憎けりゃア袈裟までと譬へに違はぬ水野の一家を皆ごろしに致してやらん。ト言ひつゝ憤怒の形相、勘太は甚く喜こびつゝ

勘「何うか先生然ういふやうに願へまする。のでこせへやす然うありましたら實に私しも此んな嬉しいことはございませんが何うか何分とも宜しう譬を打つて下せへやし。

ト言ひつゝ白井の面を見まもつて是れまた無念の涙だ間をついで勘太は

勘「シテ先生は今夜は何處へお泊りにあるのでございまする

白「イヤ思ひ立つたが吉日といふこともあるから大恩人の長兵衛どのがば身の上に卑怯お及を加へた上に忌はしき最期を遂さしめたるところの扱ては水野十郎左衛門へ必らず猶豫を致すべき場合でないから今宵のうちに發足おさんと懐中を探ッて今しも寄ひ來ッたる金子のうちの十兩を紙に包んで勘太に示し浪々中種〳〵元締にも厄介になり其方にも種〳〵世話に相成りやしたにより其は輕少だが是れは何うぞ其方が小遣ひの足にいたして取り置き呉れい。ト示すを請けんとはせず勘太は打ち消し

勘「先生何ういふ無錢に運の宜いのか私しア二三日以來賭博をして勝ちつゝけたる懐中都合宜しい時でこせへやすから此んなものを頂戴を致しませんでも貯はへはスッカリ懐中に

でせへやすから何うぞ其の御心配は御無用におすッて頂きたうでせへやす。ト突き戻せば　白「ア、イヤ〳〵折角拙者が斯くまで心を籠めた此の金子日外小紫の許へ參りし其の折にも其許に莫大なる散財を掛けて折りから夫れや是れやの禮といふ程では なかりしが何うか取り置きくれいノウ是れ勘太　勘「ヘイ然やうで夫れぢやア何時迄でも辭退をすしてをりましたからと言ッて致しかたでございません私しが頂戴いたして置くことに致しやせうへエ何うもマア夫れについてオヽお話しがでせへやすせ先生この場合で此んお浮いた話さは出來やせんがアノチエ先生小紫の傾城は小梅の曳船の寮へ今ぢやア退がッてプラ〳〵病ひ貴君のことを苦に病んで深く病つついてをりやすせ針と按摩と練藥と……夕霧の文句見てへな譯合で曳船の寮に出養生と來てゐやすせ白「ウン然やうかオヽ然ういふ眞情のあッて扨は此の身を夫れは

どまでに思ッてくれるか　勘「思ふどころぢやアでせへやせん一命を掛けて貴君のことおら神や佛に念じつヽ實に心配をしてゐるやうに聞きやしたよ　白「ウント白井は只だ是れに對する辭はなく酷し無言稍やあッて　白「兎にも斯くにも勘太どの別るヽと致さふ　勘「其んおら先生　白「勘太どの　勘「緣あらば又たお目にかゝることも有りやせう。起たんとすれば手を鳴らして女中を招き　勘「斯う〳〵女中どもヤイ先生がお歸りにあるんだぞ案内ヤさねへか。ト言ひつヽ先きへ立ッて勘太は階下へ案内につれて權八は表口より遂に漂然江戸屋かたを立ち去りました是れより決心をして因州の鳥取へ參らんとぞんじましたる權八が勘太の話しに「何うせ捨てる一命なら大恩人の長兵衛が警を報ッて水野の屋敷を騷がした其の上に急ぎ行き名乘ッて出やう」と東海道、大坂から大津に出でゝ五十三次日に歩行んで夜に泊り警を打

ち課する夫れまでは樹にも草にも心を留く大切の身の上ゆゑに心配を致しつゝ進み進んで江戸表へ近づいて參りまするといふ再たび權八の東くだりの一條より水野の屋敷へ切り込みの一件は後談にゆづって辨じます。

第十八席

エー只今のごとき輕辨の世の中では決してございませんで夜汽車に乘りますれば流笛一聲一瞥夜にして東京から大坂へ參られる斯ういふやうな譯でなく從前十里詰にしましたところで半月は掛ります運わるく暴雨にでも道中で出合ひ川留でもくひましたり彼れ是れいたすると二十日以上もかゝった東海道でございます然れば十里十二里ぐらゐなところを權八は歩行み歩行んで漸くの思ひ桑名の渡船場へ着きました出船と頼りと白井は相待

ってをる　女「アノお客さま何うぞ此方でほ緩くり遊ばしませお飯を召し食りますならお仕度も出來ますから。あゝ頼りと茶屋の女中がヤしてをりました此の時に出船を待ち合するがために腰を休めてをりまするところの白井が右茶屋の主人に命じて言はれるがまゝの登食の仕度茶を飲んで暫し休息いたしてをりまする折りから「船が出ますよ船が出ますよ船が出るよ船が出るよ。」と駈け歩き出船を知らせる船子の人、渡船場とは言へど此のくらゐ長き渡船場といふものは減多にはございません海上を丁度七里の渡船でございまする登食料を仕拂ッて權八は船に打ち乘りますれば七八名の者も同じく後れて乘りまする者もあッて船中彼れ是れ夫れへ三十七八名の乘り組み纜を解きまするなり船頭の聲として　頭「ヤレヤレ野郎其の楫柄ア確かり押へてゐろヤレ宜いか……ヤア客人帆の上へ乘ッてゐちやア可ねへせ帆の

上へ乘ッてハ可ねへエーサ、丁サ、アーサ、丁サ、エー〳〵〳〵〳〵〳〵

〳〵ドーッゴーッといふ舳で帆を一ぱい卷きましたがゆゑに八重の潮路を乘り割まする音の最と高く仕まつりまして眞平地よ船は宮の驛を望んで出船をいたしました丁度船頭一人に乘子が兩人舵を取ッてゐる小僧と以上四人で此の船は長き海上の渡船日和も宜しく進み行くにつきましては一同も其の穩やかなるに喜こんでをりましたのでございますする時に船中には農民あり商人あり僧侶あり又は虛無僧等のございます時に白井は兩名連れ立ッてをりますところの普化禪師の流れを汲む虛無僧の容子をフト目をつけました稍やあッて彼の人は燧石を取り出だしてカチ〳〵火打鐵にあてゝ熊野ポクチで點火いたさせ烟草を取り出だして一ぷく喫烟してをります白井は同じく是れも烟管に烟草を用意いたして

白　アノ僧アー何うか一喫烟拜借を致したい

白　アノ僧つかんこを承たまはるやうでせいまするが自分も武士の端くれ武門不幸にして主人に離れ今日斯くのごとく浪士の身分でをりまするが一体普化僧といふものは武士をもッて門徒といたすと聞き及びまして宗則のありましたものでございませう餘ほど法令正しくいたしましてナカ〳〵もッて嚴令なる宗旨のうちよ堅行他事あく行なはれるといふことでございますが何ういふ法則でございまするか承たまはッて置きたいものでございまするが。ト辭に詰づいて虛無僧は　僧　ヤ夫れは船内の爵さ晴らしに然らば尊公へ對しては話しを仕まつらん此の宗則といふものは當宗は勿〳〵正しいものでございッて昔し普化禪師といへる者が漢土より此の日本國へ始めて渡ッて來られ夫れよりして皇國を修行をなされて

とにあッたトコロが其の修行をいたしまするに語音といふものが了解つかなつらんから此方で言ふことは先方へ通ぜず又た先方の言ふことは勿論此方へは皆無で爲めに修行の道立たず殆んと大困難を致されたが素より菩提智識の普化僧ゆゑに忽ち我が宗の祖先は始めて尺八といふものを案じ出だされたもッて普ねく日本國中を修行をいたす就ては此の尺八にも謂れのありまするもので此の穴の大なるを釋迦牟尼如來として皆お一つ宛の此の穴に對して夫れ〳〵の佛名の備はッてをるものにして然れば其の普化禪師に四人の弟子あッて是れに亦た四人づゝの弟子出來て四十四十六人十六派に別れて其の十六本山のうちの一つある吾僧は金洗派の本山たる下總の國古河の梅林院一月寺の徒弟にして斯く両名同宗門のものでござる相つらなッて其の普化禪師の流れを汲んで日本國中を修行をいたすものでで僧侶といへ

斯く頭に斯くのごとくの毛を生じて結んで後ろへ是れを下げ毛を斷ざるは武門不幸の武士のみを以て門徒といたさいらう所以は忠あッて私しおく主人に仕へて實とや誠忠なれど時のすぐれざるに出で會ひ惡人に讒言されて浪々をおし以て二君に仕へざるところの誠心正しき者のみを弟子といたする宗旨ゆゑ爲めに斯く毛を其のまゝに致しおいて二君に仕へざれど主人より召しかへされるの事ありいらへば何時でも元通りに頭の飾りを結ひなほして歸參をいたす天晴れ仕官につくべき我々の心でござる身も武士にして失禮なながら時に不祥に出で會ひいらふて今日偶見込みもなく往來を徒づらに天下をあされるにあるあり世に我が宗門の一人に成りたまへ宜しくば世話をすべし。とて事に寄せて宗旨の起りを說き以て權八を吹擧なさんといふの深切心愛におよんで白井は甚く心に何やら感じけん言

葉を改ため　自悉とけなうございますするが是れより开もや宗旨の修業については何ういふことと扨はまた虚無僧に付いて他宗の者が出會いたしいらう時に如何ある法則のありしものあるかと此の事おぞを頻りに問ひ糺しまする其の心の底は如何ある考へのありましたものでございますするか彼れ權八己れ江戸表へ道入るにのそんで姿を虚無僧よ扮せんとの下ごしらでございましたは問はれるがまゝに両人の虚無僧は普化僧の秘密までも許いて演説をなし長き渡船の其のうちに白井は是れを聞き出しまする一段より身を虚無僧に扮ふして大膽にも大江戸へ入り込み天下旗本の一人たるところの水野十郎左衛門が屋敷へ切り込んで悪剣村正を振ひ多勢の人を切りまするの一段は次回にゆづって委しく辨じまする。

第十九席

エー前回に引續いて伺がひます此の虚無僧といふものは太層法令の正しいものでございまして早いお話しが先づ何處の宿から宿へ道入って參りまして此處を修行しやうと致しまして右側なら右側の端の家を一軒笛を吹いて修行をいたしますれば右の側をズーッと向ふまで通り過きて左りの側は貰はんのでございますし良しや左りッ側で合力をしやうとしても受けず若し受けたければ今度引返して左り側をズーッと修行をして歸って來るといふやうお始末で右を貰つたり左りへ飛んだり左りを中し受けたり右へ飛んだり致しまするといふやうなことは決して致さんのでございまするソコで途中で虚無僧にツパト出合ふとフト氣がついたはうが先きへズーッと笛を吹きます而して先方で跡で氣

がつきますと其方の方でも請笛といふことを致して是れでも笛を吹いて相互ひに歩行を進めて參りまして互ひに出で會ひましたところで爰で又た双方笛を吹きますのを是れ通常人の謂ゆる應答でございます是れから跡で氣がつきました請け笛をしたはうの僧侶が叮嚀に禮辞をして　甲「拙僧儀は何派の何といふもので是れあります。竹名は斯う實名は斯やう戒ひは實名を隠しまして不都合はあいトコロが先きへ氣のついた方の人がチョット會釋をして　乙「自分は何れの何といふものでと是れへ對して應答をする爰で始めて　乙「天蓋をお取り下さい　甲「イヤお手前のはうで　乙「然やうでございます　甲「イヤ拙僧は甚はだ失禮ではありますが。ト笠を取って木の根なり或ひは道端の茶屋なりへ腰をかけまして休息をいたしますると今しまするのは是れが虚無僧の法式であったのでございます天蓋を取るは無禮冠ッてをりますのが禮儀を

厚ういたしますする然れば高位高官の前でも天蓋といふものは決して取るべき筈のものではなく冠ッてをりますのが先方様へ禮儀を正しますするさうな取るが無禮。冠るは禮といふところの渡船のうちに最と長き虚無僧の法則の話しに權八聞き終ッて心のうち這は身を恐ぶには虚無僧こそ然るべし虚無僧となって以て水野の容子扨ては江戸市中の諸役人の目を暗まし本望を遂げやうと斯やうにそんとました折から海上恙がなく宮の着船場へ帆を卷きおろして船を寄せた會釋をいたして虚無僧に分れ未だ日が高きがゆゑに彼處より數十町を引返して名古屋へ乗り込み城下の彼の有名ある金の鯱鉾雨ざらしといふ名城を見物に參るもあり急きて夫れより又た次の驛へ對しまして道を急ぐもございます

樂より權八は一心長兵衛の譬たる水野を打たんといふ覺悟で

でございまするからして虚無僧の形装を整のへ虚無僧となってソコデ是れより江戸表へ急ぎ急いで道芝の露蹈み分けて驛路の數も嵩んで箱根峠の關所も難なく越えまして湯本へ來り福住の前より小田原國府津さては大磯無事に戸塚、程ヶ谷、神奈川、川崎、大江戸の入口たる品川の親宿より高輪に相かゝりましてございます勿論一日に是れだけ參ったわけではないのでトコロが身はおもねものゝ情けなき權八の一心ことすら白井は頗ふる美男でございまする人の目に立ちまする人物ゆゑに頗りと心を碎きつゝ先づ身を山の手へ這入りまして四谷伝門外の麹町十一丁目高砂屋利右衛門といふ宿屋がございましたから是れへズバと權八が宿さばやと這入りました

主「入ッしやいましお客さまだよお洗足水をもッて來な。主人が帳場のうちに指揮に召仕ひの者が夫れへ運びまする洗足水。笠を冠ッたまゝで上り鼻で是れから足の拵

らひを取り夫れよりして足を洗ッて天蓋を冠りしまゝ案内に連れて奥の下座敷の一室へ通りましてございまするソコデ始めて笠を取ッた女中が敷物を夫れにおはしおがら權八の面を見てビックリ會釋をして見世へ來ッて

女「チョイと旦那、只今のお客さまは虚無僧のやうぢやアございませんワ恐ろしい大層色白お大顔に奇麗おかたでございますワ

主「ウン然うかへ

女「アノ奇麗でございますチェ旦那、天蓋を冠ッたまゝ座敷へ通るおんてへナ

主「イヤ〳〵然うでおいのは虚無僧さんといふものは天蓋を冠ッたまゝお通りになるのが彼れが常なので禮儀を知ッてお在なさるんだから夫れゆゑに彼のやうなわけおのだらう能く講釋師が高座で天蓋を冠ッて虚無僧が出れば壁へ高位高官の前へ出ても苦しくおい冠るが禮だと斯う講釋師が饒舌るのを聞いたことがあるワ

女「ハア然やうでございまするかトクンに奥座敷で手を

打ちおらす主人は聞き取り「主」是れお手が成るぢやアねへかンヲ未だお烟草盆が行ねへのだお茶も持って行かないからだらふ早くしおくッちやア何ねへせ。ト頻りに急き立てつゝお茶烟草盆等の直ぐ持參をして奥の座敷へ女中が參ッて白井に出せば權八は女中に對ッて「自」アー女中や誠とに是れは些少だが修行の身ゆゑ何うぞ笑ふて呉れるナ其方へ得さするから是れは主人へ戴の茶代の印しまでだ風呂が湧いたら敎へてくれよ夫れからアノ膳の上で酒を飲むから其の積りで何うぞ支度をいたしておいてくれ。始終を承たまはッて女「畏こまりました」してございまする斯やうに淫叮嚀あお手當有りがたう存じます帳場へ來ッて是れを傳へる主人は甚く喜こんで夫れ〳〵入浴のこと扨ては「お膳部も必ず付けて」ト頻りと待遇しまするは衣服は虚無僧でございひまするけれど其の對するところ頗ぶる鷹揚にして且つ白井の美男なる

に多方何れかの淫身分のある方が道樂半分の虚無僧にでも成られしものにてや有らん「斯やうに存じて最とも叮嚀あるところの待遇であッたのでございまする斯やうあことを辨じまするとお叱りもあるかも知れませんが從前は此の盗無僧あそには隨分お旗本の倅隠居や淫次男淫三男が倅道樂で最とも立派やかな扮裝をおさいましては能く倅修行にお歩行きになッたものでございまするさうなでございますから尺八を吹いて來る「出ませんよ。なんと言ッて斷わりますすとサア大變で上り鼻へ座りこまれて虚「出あいとは何だ怪しからんことをヤす奴だ乞食ではないあぞといふ掛合を蒙ふッたことが從前は幾らもございましたさうで、デございますから「倅無用でございます」斯う言ッて斷わるので用があいと言へば夫れまで成ひは手が塞がッてをりますよ」斯ら言ふたものであッたのでございます、デございますから從前はモ

ゥ武士には大變に權威を持たして市中を謠あゞを謠ッて歩行きまする浪人稼業のものですら「高砂や此のうら船に」と來れば出て行ッて合力をするんでも扇の上へ載せてやるスルと其の鳥目を扇でうけて胸の邊へ持ッて參ッてチョット。頭をウナ垂れて是れへ對する辞義をしたもんでございます然れば其の時分江戸市中の浪人組の頭を乞胸仁太夫といふ乞胸とは胸に乞ふと書きます尤とも本姓は山本といふんでございますが誰しも山本仁太夫とはヤさんで殆んど乞胸が苗字のやうになッてをッたさうでございます然れば仁太夫それが頭で大地へあゞ投げた錢は良しや百両投げても諾ひを諾ッて來る浪人の武士たるものは投錢の合力は取らないといふやうな譯のものでありました此の浪人稼業といふものは大變な權利をもッたので既に吾が黨の營業も從前は天下の記錄讀みと言ッて浪人赤松清左衛門氏始めて此の營業

をおし爾來講釋師は藝人ではない記錄を讀んで世間に知らしめるの浪人稼業だといふのでは大小を常に帶用をして往來をいたしまするにも肩肱を張ッて歩行いたものださうだといふことは師の桃林よりも承たまはり扨は同業の老功の者よりも聞きをります、デございますから壓制的の封建時代よ良しや將軍がは他界の大喪がありましてもは停止は我が社會には無かッたので軍書講談を除くのはか總てのものを停むるといふやうなわけで土留めと言ッて普請などは六十日ぐらゐは停止を蒙むッたもので其の中でも我々は營業の停止は無かッたけれゞ今日は人智が進んでゐるから從がッて我が社會の營業者も皆な從前とは人々すゝんで居りまするでございませうデ恐れ多きところに慎しむべきことがあれば政府で營業を停めずとも遠慮は我れ〳〵勤め來ッて只今までは居りまするが從前は然ういふ習慣で良し夫れだ

けに我が社會が過渡時代の勢ひがあッても遠慮を致さねば成りません失れを誇ッて營業をやッたのは只今となりますと昔しの人のはうが大きに鼻白ひ次弟であるのかも知れないので餘事は扨ておいて虚無僧も勿〳〵只今市中を天蓋を冠ッて竹にありたやだの「ヤートコセイ」等や一つとせを吹いて銭を貰ッて歩行く彼んな譯合のものでは無くッて勿〳〵法令正しきもの決して外曲と言ッて戯ふれらしき曲といふものは虚無僧は吹かざるものので然れば白井は是れから日々江戸川端の水野の十郎左衛門が門前を修行をいたして敵の容子を密かに伺がふところが門内寂寞として何とあう陰々たる有り様は开も然やうでございませう主人十郎左衛門公儀の聞ゑ宜しからずして思し召し是れあッて身分柄としらべることあり今日は揚り座敷へ打ち入れまして面して周囲厳重に青竹の矢來をもッて結びまはしてございまする

「扨は元締を打ちしことより此の結果であるか未だ日浅きに思の報いは恐ろしきものであるか何れにしても十郎左衛門を切らなければ眞とにもッて残念千万ありとて二三回家の周囲を伺がひましたのは然うでもおいお闘べ済みにあッて帰り來らば素より身を抛うッてをる權八ゆゑ飛び込んで一刀に切らふト代笛と見せて錦の袋に入れて腰に用意を遂げたる村正の一刀鯉口を切り袋の口を解いて伺がひますれども何うも宜い工合に參りませんスルト直ぐ一町ばかり向ふの角を左りへ曲ろふといふところにお辻番がございます餘まり此の邊のところをプラ〳〵歩行いてをりまするのも殆んど他目もございまするで辻番へかゝッて權八が　白「アー一すとお辻願ひたい　番「ハイ　白「用弁所を少々借用いたいが　番「ハイ何うか其處にあるからお通入んあさい併し必づけてやッて貰はふ　白「よろしゆ発ト　お辻の後ろにござ

いまする便所へ這入ッた從前は共同便所といふものが無いのですから辻番に用所を借りるといふのは此りや當り然お話しで小用を足してゐると聲の聞ゐた手よ取るやうな中間と聞きおよぶ口上にての話しに　中「今日は　番「イヤア宜いあんばいに天氣に成ッたヲ……何處へ行ッたんだへ　中「エー殿様にやア客がありてへんで鞘を買て來いッていふから宜い鞘ぢやアねへか斯う見なせへ一貫八百目かゝるせ殺てもらッて買ッて來たんだ　番「オゝ宜い鞘だナ蹴合ッたのか大變に傷があるやうだが大層血がついてゐるぢやアねへか　中「ナアに然うぢやアねへ殺るときに馴れねへもんだから此んお致やアがッたんだ、何でございますせ爭鬪ッた鶏と夫れから只だ殺めたのぢやア肉が違ふッてへが不思議なもんでございますすねエ爭鬪たのはねエ堅くッて食へねエ夫れだけ獣類でも勇氣が身体へ充ち渡ッてゐるんですねエ　番「

オイ〳〵チエ笑談言ッちやア可けねへせ　中「ナゼ勇氣が身体へ獣類でも充ちわたッてゐるからゐると斯う言ふんだ噴き出して辻番の親父が　番「ダカラよ獣類と言ふおア獣のこッた　中「エヽ　番「獣類が獣で其りやアイヤ鳥類だよ鳥の類ひてへんだ　中「ウン然うか己らア又た町内と聞いた兎角町内に事なかれだ。ト打ち笑ひつゝ　番「トキに町内に事なかれとゐやアお前んところのお隣り屋敷の水野は一体何うあるんだ　中「彼れか彼れア自業自得で詮方がねへ町奴の幡隨院を卑怯なことをしたもんだから大体今日らア殿様ア切腹で家内中の者は死罪におッたり身輕いものは門前拂ひで今夜一晩ぐれへしきやア水野の内の者は屋敷よやアゐられおからふよ　當ヂヤアモウ其様なことに成ッたかおア　中「成ッたとも成ッたとも確かおところから聞いたんだオウ〳〵其りやア然うと大層話

しが變ッて來て、思はず知らず遲くなッたが何りや歸らう主人に遲いと叱言をくはなけりやア成らねへや大きにお喧ましう。ト中間が世間かまはぬ調子だかに始終を承たまはッた權八自分も跡より立ち出でゝ辻番の親父に禮辭をして此の場を退散をいたし高砂屋かたへ立ち歸る道すがら熟〻勘考して「若し彼の下郎のことのごとくなりせば水野を打つは打ちがたかるべし兎にも角にも今宵屋敷へ乘り込ん怨みある十郎左衛門が屋敷の奴ばら片端から皆ごろしにしてくれんずものを。ト爰に恐ろしき覺悟をいたし權八が水野の屋敷へ切り込みの一談より惡の報いで白井が身の修りに至るといふ所も落着の一席は後回に委しく辨じます。

第二十席

サテ立ち歸ッた白井は主人に悉皆の計算の書付を請求して夫れより殘らずを仕拂ひましてソコデ主人を招き　自まことに夜分發足をするといふのも妙あわけだがチト至急に國表へ立ち歸らおければ成らないことが出來をいたして是れより發足をいたす長〻お世話になッて飛んだお手數をかけました　主イエ何うつかまつりましてモウ發足になりまするのでございますかと夫れは〻飛んだお麁末をつかまつりしてございまする。と爰で權八は草鞋なぞを買ひとゝのへて店先きに仕度をいたせば足ごしらひ殿重にいたしまして深網笠をいたゝき此家を立ち出でまする此のときの扮裝は浪人のこしらへにて虛無僧の仕度ではおいのでございまする道を急ぎつ水野の屋敷へ乘り込んで來ました刻限を計りまするに彼れ是れ四ッ時分と覺しき頃はひ近づいて見ればヤン〻淑莫として四邊りに君もおく折りから

聞ゆるチャン〳〵チャチャン「四ッでござい」チャン「四ッでござい」四ッを報知の夜廻りが頻りと廻り來られます遊きをうかゝひ權八は兼ねて斯うもいたしたらば恐び込めるならんと用意いたしきたりましたるところの縄階子を「ヤッ」と掛けまそるや階子につかまってヤウ〳〵の思ひで塀を庭へ乘り越しました泉水の廻りを廻ッて樣側の先きゑ近づきますれば中には寢入りしものか音もあらざる容子、時に權八惡劍村正の鞘を拂ひまして是れから敷居の溝を削りました而して切先きを戸の間に入れてグイとゴヂリますれば雨戸はわづかに夫れへ開かれましたにより氷のごとき得物を引さげて「ズバ」と屋内へ恐びこみ四邊を伺がッて見ますれば森〳〵としてをるガラリ塗骨の障子を明けて這入りますれば一人の女が結拂ゐ夜のものゝ中に臥ッてをりましたが

女「誰れちや何者ぢや。ト起きなはッて白井の容

子を見」

女「曲者こそ恐びこんだり曲者なり。ト大音に呼はる「爾れ」と言ひさま飛び込んで權八が拔きもてる一刀を閃めかせば「キャッ」と一聲ヅデンドウ右の肩より左だりの脇へかけて切り下げられたり此のとき二間ばかり隔ッて臥ッてをりましたる當家食客の浪人もの両人是れなん長兵衛が當家に終りまする其のときに一方を助けて幡隨院を惱ましたる奴

浪「爾れッ。ト得ものを取ッて權八を望み切り込みきたッたヒラリと身をかはして「エイ」と聲、左りの一人を切れば「是れハ」とおどろき退るを横なぐりに右の一人をば其の場へ切り倒しました「ドッ」とばかりに崩れまするところの次の間より時に起き出でたる家來の奴二人を切ッて次きを見れば早や物音に馳せ付けたるものどもゆゑに逃しハせじと權八は飛びかゝッて「エイヤオー」ト右左りに切り拂ふバッタバタ元よりすぐれし白井の妙手に何ぞ堪らん殘りおく此の者ども

は打たれましてございます此のときに藏ろいて當家を守る役人ども大勢「曲者あり」と各々得ものをもッて玄關脇の一室に詰た合ひの公儀役人の來られたり元より白井は是れらの人に怨みなければ飛鳥のごとく身をおどらして權八庭前へ馳せ出だすあり向ふの黒板塀プッつりと村正を突ッ込みましてエイと引けばボリ〳〵〳〵グイと左りへ切り曲げて右の上へ又た三四尺切り破りつ足をあげて丁と蹴ますれば脆くもわづかの黒板塀むかふへ身をのがれ得ますするだけの穴は破れて明きましたサッと脱け出だしまするまゝ雲を霞と逃げ去ッたり扨て其の夜は權八直ちにいづれへか名乘り出でやうと心得てさまよひさまよふて坂を登り傳通院の前の通りから本郷へ掛り彼よ〻湯島の切り通しへ出でまして坂下へおり眞ッ直ぐに廣小路へかゝり三橋を渡ッて上野の袴越しのところへ參りました丁度當今の下谷區役所のあります

すところが從前は寺でございまして彼れを世俗上野の袴越しと唱へる此處まで逃げ延び來て「ホッ」ト一息「茶めし餡かけうどん」といふ看板の左り手に出て茶めし屋がありましたから是れへ這入りました

主「へイお出でなさいまし

自「亭主や

主「へイ

自「何がある

主「へイおしたしにずぢのうまそうにつみいれ汁に餡かけ豆腐

自「然うかヤ味噌汁は旨いなつみいれの汁とずぢのうまそうで熱うして一德利くれ

主「かしこまりましてございまする是れから傾ふけながら熟〻白井が考へたが「明日にも我れは池田光仲公の屋敷に訴へ出でし而して立派に本庄の三男か末の娘に打たれて死おふ」ト飲むうちに三四本の德利を明けて酒氣の充分に彌や增しましたところからック〳〵權八が思ふに日外彼の棺桶の拵太に遇ひし其のをりよ小梅の引船ぢはりに寮があッて此の寮へ小柴が參ッて出養生をしてゐるといふことを聞いた

か未だゐるか夫れとも又はをらざるか參ッて生前の對面未練なやうだが別れを告げて參らふと膳太くも覺悟をいたし食事をして計算を仕拂ひ表へ出でたトタンにゴーンと撞き出だす東叡山寛永寺指をりかぞへる夜半の鐘は九ッ(當今の零時)を報ひまする諧づいて權八が頓倒して刻限も分らんでをッたが未だ九ッぐらゐなものかしらフウン然うか四ッの柏子木のときに切り込んで切り捲ッて急いで袴越しへ逃れて一ばい飲んだ丁度子の刻フッン其んあものであらふ今夜は吉原は小ッと危おいにより千住へ行ッて一夜の春此の夜の名殘りに遊んでやらふ」ト戻り駕籠を仕立ッて橋向ふ掃部宿で下りまして其の夜は某ある一軒の遊女屋にあがッてヒッソリ遊んで明けの早チト早く立ち出でまして夫れより本街道は危ふしと存ぜましたにより千住の小菅堀切りへかゝッて須田村から斜に乘ッ込んで來た小梅の引船の通りサ

ア何處が三浦屋の寮なるか殆んと尋ねあぐんで茫然といたしてをりましたる折りから一軒の潜り門の立派やがある門戸を開いて中より出でる一人の若い者おそろしい深い岡持ちを携さへてをりまする言はずと知れた出前持ち夫れと見て權八は喜こびつゝ傍へすゝんで　白「是れ〳〵アー少々お前に聞きたいが　若「ヘエ　白「此處いらに三浦屋の寮があるかナ　若「ヘエ三浦屋の寮は只今わたくしが衛門の寮がありまするか　白「フ出前をもッて參りましたのが三浦屋の寮でございまする　若「ヘエ三浦屋の寮でございまする　白「フウン是れがフウン然うか懐中から僅かな金を取り出だして紙につゝんで權八が、白「是れ〳〵　若はだ輕少だが是れはホンの鼻紙料だ　若「ヘエ何でございますか何うも是りやア旦那頂いちやア濟みませんが折角の思し召しでございますから頂戴をいたします　白「フウン就ては其方少をし聞きたいことがあるのだトいふ

のは他のことぢやァおいがアノ三浦屋かたの彼の小紫といふ遊女が出養生に參ッてゐるといふことを聞きおよんだが若しや此の寮へ參ッてをりはしないか何うであるか存じてゐるなら敎へてくれんか是れ。ト氣まり惡氣に尋ぬれば氣の毒さうに彼の男は若「へエ然やうでございますが病氣が少し快くなッたもんですからナンッたんでございます傾城は先々月の月末までお在でおすでございますエ三浦屋へお歸りにおッて此のごろぢやァ勤めをあそばしてゐるんでございませうよ　白「エ！然やうかアウン。ト流石は失望落膽をしたが是非おく彼の者よ別れて致かたがございませんから再たび歩行むともおしに向ふ嶋の堤つゞきへ掛かッて來た三めぐりの鳥居まへに向ふの眞乳山を見あがら景色よろしきところの日あたりの宜い一軒の茶見世がございました是れへ腰をかけて一喫烟草をくゆらし女がもてくる茶などを飲ん

で休息をしてをります前を流るゝ隅田川に棹さして上るもあり艇を押して來るもあり旁〳〵是れ等の船などをながめて行くする是れより先きの方針は如何にいたしたものであらふと頻りと名乘ッて出でするのに思案をこらし又た小紫に對面をもいたしたいものだが遊廓へはチト參り兼るが兎やせん如何にと思案のうち刻限よはゞ過しましてございまする折りから五人連れの役人と見ゆるものがドン〳〵と此の家のうちへ參りまして樣先きへ腰をかけた此のときに茶を運ぶ彼の女中しばらくすると又た五六人來られて權八の左りの樣臺に腰をかけましたが何うも容子が厭しいから　白「是れ女中や是れへ僅かだけれど茶代をおきました。トおにがしかの志ろざしを差しおいて往來へ出やうとする一刹那「ロ用」とうしろより一人組みついた「心得た」ト其のものゝ襟髮つかんで遮かの向ふへ投げ出だした又た一人正面から打ち

込み來るを体を替しつ「エイ」と一聲抜き打ちに胴切とそつかまつりましたソレ抜いた〳〵」ト呼わるをりに土手下にも忍んでをりましたる捕方飛んであがつて前後左右を取りきらんとす後ろへは近づかしめす櫻の大樹を小楯にとつて白井權八キッとあつて大音あげ　白「ヤア何奴あれば猥籍あり斯やうな殊に粗暴な擧動をうける此の身にとつて覺ゑはないが如何あれば斯ばかりある猥籍なす。大音あげて呼われば此のときに捕手の頭と見ゑまして役人それへ近づき來り　役「いふナ鳥取浪人白井權八なんぢの作る積惡は公儀のお手帳にとまりをるところあるぞ天命を知つて恐れ入つて縛に就け尋常に縄にかゝれよ權八昨夜の惡事も相助かつて其方のあとより是れまで附けきつたり　白「ナント……役「最前尋ねし三浦屋の小紫のことを聞いたる其の一人も公儀の御用を聞くものあるぞサア恐れ入つて縛よつけ尋常に縄かゝれ

と呼はつたり權八このとき　白「オヽ斯ぐあれば是非におよばん併しながら吾儕には鳥取藩の本庄助左衛門が三男に打たれやらねばならぬ身のうへゆゑ氣の毒だが爾等ごとき汚れ役人には勿〳〵もつて手に乘るべき權八はあらず死にものぐるひの働きあす白井の持てる此の劍の味はひ見せる覺悟しろ。ト呼ハッたり　役「ソレ打ち止めろト下知の下より四方八方から一度よかゝッて來た飛鳥のごとく是れを切りぬけ手早く土手を馳せくだッて岸邊につなぐ船のうちへ飛び込んだ追ひすがらんとするうちに繋留を切り捨てゴー〳〵流るゝ隅田川の其の干潮につれつゝ船はうごき出した刀を投げすて手早く棹とッて船を中流にうき出たして時に權八あたりをキッと見ますれば道は开もいかに早や今戸橋場の最寄りから東橋の邊りへまで公儀の役人充分に固めたり爰で白井は「モウ是れまでと存じまして遂に船中にて大音

のあげ　白いかに役人衆わが身は池田藩の本庄助左衛門が三男に打たるゝ覺悟でありしに斯く公儀の手配り嚴重あるからは最早や此の場を逃れんやうなし好ッて此のところに相果るなり只今最期の折りの願ひは責めて我が此の首級は彼の本庄かたへお送りを願ひたくどんとまするぞ未だ白井權八が身の終り見といけあれやと大膽にも左右の足を踏みきり例の惡劍村正を逆手に取るよと見ねしがアッリッと左だりの脇腹へ突き立て右りへころは引き廻す鮮血迸ばしッて恐ろしく「アレヨ〳〵」というちに返す一刀咽喉笛ふかく突きつらぬきドウと倒れて其のまゝ息は絶ねました爰で船を浮べて役人その屍骸を引き取りまして夫れより直ちに本人の言葉もございまするからして池田侯へ照會をすると池田家よりしては當家に白井權八などといへるものは一向關係の是れあいものおりとありまして斷然かけ合をお謝絶わ

りになりました從前諸侯では耻辱となりまするやうなことかありますれば必らず是れを謝絶いたすは能くありましたお話しにてソコデ是非おく是れを品川の鈴ヶ森において梟首獄門といふことにいたした打てば響くで彼の三浦屋の全盛小紫が此のことを承たまはり甚く慨いて悉く泣きしづみましたが町奴の遺族のもの、水野の屋敷へ權八が切れ込みましたところの其のてゝろを汲みわけて金にあかして屍骸をもらひ是れを目黑の一寺院に葬ふッた是れを傳へ聞いて彼の小紫が其の身の年明けを待つて自由の身と相成りましたときゝ白無垢を身にまとひスッカリ覺悟をして此の墓へ尋ねまいり稍やしばらくのあひだといへるものは宛然ら生ける者に物を言ふごとく或ひは諄き或ひは慨き悲嘆の涙だに沈んでをりましたが　小「南無俗名白井權八さま然らば妾も追ひついて連の盞の新世帶樂しく冥土で暮しませうト

言ひも終らず用意の懷劍咽喉もと深くさし通して遂に此の世を去りました此のことを町奴の人々の聞くところとなり惡は惡なれ又た其の俠あるところも是れありまするによって夫れに斯くなっても遊女ながら小紫の心を汲み取り両人を合葬して始めて比翼塚といふものを愛に殘されました傾城に眞實あいとは其りア誰が言ふた目黑に殘せて比翼塚白井權八の小傳これにて徹頭徹尾もれなく辨じつくしましてございまする

白井權八 終

明治三十一年二月廿八日印刷
明治三十一年三月六日發行

白井權八
求光閣發行

講演者　鈴木紋次郎　東京市京橋區八丁堀一丁目七番地　放牛舍桃湖事
發行者　服部喜太郎　東京市京橋區本材木町三丁目廿番地
印刷者　大塲沃美　東京市神田區南乘物町十五番地　龍雲堂
發行所　求光閣　東京市京橋區本材木町三丁目廿番地

求光閣發兌小說書目

◎水戸光圀公記　邑井吉瓶口演
◎慶安陰謀錄　邑井吉瓶口演
◎金看板藤九郎　柳香小史著
◎江戸小町　須藤南翠著
◎爲朝小僧　松林伯圓口演
◎寛永御前試合　田邊大龍口演
◎享保五人白浪　松林伯圓口演
◎天狗小僧　櫻井三世口演
◎佐野鹿十郎　双龍齋貞鋭口演
◎寛政力士傳　双龍齋貞鋭口演
◎天保義賊鼠小僧　田邊大龍口演
◎日本左衛門　田邊大龍口演

◎赤穗美談雪の曙　柳亭燕彦著
◎絶世の美人　柳園小史著
◎高山騷動雄龍丸　柳園小史著
◎忠臣水滸傳　山東京傳著
◎文覺實傳　松林伯知口演
◎助六實傳　桃川燕林口演
◎大和三傑士　柳園散史著
◎鬼神の於松　田邊大龍口演
◎痴人の夢　南翠外史著
◎義俠一心太助　双龍齋貞鋭口演
◎初杜鵑　柳園小史著
◎女郎花五色石台　曲亭馬琴著
◎きられ與三郎

097207−000−7

特9−2

白井権八

放牛舎　桃湖／講演

M31

DBS−1020